

ひけり、子は京に宮づかへしければ、まうづとしけれど、まばく、えまうです、ひとつ子にさへ有ければ、いとかなしうし給ひけり、さるにしはすばかりに、とみの事とて御文あり、おどろきてみれば、歌あり、

老ぬればさらぬ別の有といへばいよ／＼みまくほしき君かな

〔今昔物語語^{二十四}〕土佐守紀貫之子死讀和歌語第四十三

今昔紀貫之ト云歌讀有ケリ、土佐守ニ成テ其國ニ下テ有ケル程ニ任畢リ、年七ツ八ツ許有ケル男子ノ形チ嚴カリケレバ、極ク悲ク愛シ思ケルガ、日來煩テ墓无クシテ失セニケレバ、貫之无限リ此ヲ歎キ泣キ迷テ、病付許思焦ケル程ニ、月來ニ成ニケレバ任ハ畢ヌ、此テノミ可有キ事ニモ非ネバ、上ナムト云程ニ、彼兒ノ此ニテ此彼遊ビシ事ナド思ヒ被出テ、極ク悲ク思エケレバ、柱ニ此ク書付ケリ、

ミヤコヘト思フ心ノワビシキハカヘラヌ人ノアレバナリケリ、上テ後モ其ノ悲ノ心不失テ有ケル、其ノ館ノ柱ニ書付タリケル歌ハ、今マデ不失テ有ケリトナム語り傳ヘタルトヤ、

〔後撰和歌集^{十五}〕太政大臣の左大將にて、すまひのかへりあるじし侍ける日、中將にてまかりて、

事をはりて、これかれまかりあかれけるに、やむことなき人、二三人ばかりとゞめて、まらうどあるじさけあまたたびの後、ゑひにのりて、こどものうへなど申けるつゝゐで、

兼輔朝臣

人のおやの心はやみにあらねども子を思ふみちにまどひぬるかな

〔大鏡^三左大臣仲平〕左大臣仲平、このおとゞ、これもとつねの次郎^略、中真信公^{藤原忠平}よりは御兄に

あたらせ給へど、廿年まで大臣になりをくれ給へりし、つゝゐになりたまへれば、おほきおとゞの御よろこびの歌、